大泉黒石の〈切支丹物（きりしたんもの）〉

山本　歩

一、黒石文芸における〈切支丹物〉

大泉黒石『俺の自叙伝』[1]の記述を信じれば、彼は生まれてから「小学校を三年生まで」[2]、「中学の三年級」[3]から卒業までの二年程度を、長崎で過ごしている。実際、長崎の経験は『自叙伝』以後の中短篇作品に反映され、例えば『黄夫人の手』（一九二〇年一月）は、新地中国人街を中心に長崎市各所を横断する舞台構成となっている。

他方、初期に見られるいくつかの〈切支丹物〉では近世期の長崎が描かれ、豊臣政権期までの長崎が理想化されている。『自由』と『生気』と『信仰』と『平和』に充ち充ちて、武力と云ふものが民衆の夢にも宿らなかつた」（『女人面』）長崎が、徳川幕府の「武力」による弾圧に滅び去る――そうした歴史認識のもと、〈切支丹物〉は書かれている。本稿では、二作の〈切支丹物〉を中心に、黒石文芸が〈切支丹〉の表象から見せてくれるものを明らかにしていこう（キリシタンについては、作中表記に合わせ「切支丹」と表記する）。

黒石と同じく『中央公論』「説苑」欄にて活躍した村松梢風は、自分たちの作品形式を、「興味中心のものを書いてもそれに適合する読者の階級や範囲が」[4]異なるとして、隆盛する「大衆作家」たちと区別している。黒石は「〈読み物〉作家の扱いをうけてきた」[5]作家だが、大衆文学の波に乗ら／乗れない、今日の言葉で言う〈カルト〉なところに自らの位置づけを見出していたのだろう。中短篇のほとんどは、東西のオカルト知識に基づく怪談小説、数奇な出来事を描く奇談小説と言える。黒石はそれらを「怪奇小説」と一括したが[6]、そうした「怪奇小説」の中に〈切支丹物〉がある。いわゆる怪談ではなく、奇談――日常的な世界から飛躍する、常軌を揺さぶる事件の

物語――である。

さて、ここでは長崎の南蛮貿易時代、および切支丹の存在が物語に関わる形で登場する小説を〈切支丹物〉とする。その理解に基づけば、次の黒石文芸が相当する。

『奇蹟の門』（初出＝一九二〇年一〇月『国粋』）
『葡萄牙（ポルトガル）女の手紙』（初出＝一九二一年四月『改造』）
『南蛮妙話』（初出＝一九二一年四月『雄弁』）
『紅毛船焼討』（初出＝一九二二年一月『大観』、一九二四年五月『黄夫人の手』収録に際し『女人面（ワントウ）』に改題）
『聖母（マリア）観音興廃』（初出＝一九二二年一一月『鈴の音』）

『奇蹟の門』は自叙伝的な体裁を持ち、「私」と親戚の「お糸」が手に入れたロザリオが、「文政八年」の先祖が使用していたものであったという「気味が悪」い「奇蹟」を描いている。絵踏による改宗を迫られ、表向き浄土宗となりながら、ロザリオを稲荷の祠に隠して信仰を保った切支丹の少女が「私」の先祖として語られる。『葡萄牙女の手紙』は在住者・訪問者のポルトガル人が禁教に巻き込まれる緊張を描いている。禁教の余波を異邦人の目から描いた意欲作である。

いずれも興味深いが、本稿では紙幅の都合上、歴史小説の体裁を持つ『紅毛船焼討』＝『女人面』（以後、主に『女人面』の呼称を使用）、『南蛮妙話』＝『聖母観音興廃』（設定に類似が見られ、ここでは前者を元に後者が書かれたものと理解する）を扱う。知名度の低い二作であるため、作品梗概ならびに基礎的な読解を経由しておこう。

二、『紅毛船焼討』＝『女人面』

「私」とその親戚の図書館員「鳳之進」との対話を通し、江戸初期の長崎が語られる短編『女人面』。大泉黒石全集刊行会による調査[7]、およびそれを発展させた谷澤昌美「大泉黒石　著作・刊行物リスト」[8]においては初出不詳の扱いであったが、今回、一九二二年一月の『大観』に発表された『紅毛船焼討』が初出にあたることを確認した。これにより、『女人

面』が『聖母観音興廃』に先立ちつつ、同年に書かれた作品であることも判明した。後述のようにモデルも共通し、〈切支丹物〉としての姉妹作であると言える。

『紅毛船焼討』から『女人面』へ、加筆修正は見られるが、大きな異同はない。ここでは二点だけ特筆しておく。一点は、初出末尾には「（作者云ふ）この物語を書くに就いて作者はマキシム・ゴリキー氏の『イゼルギル』に負ふところが少くないのである。」という付記があること。すなわちゴーリキー『イゼルギリ婆さん』の影響があり、鳳之進と「私」が語らう構成や、義人の挿話に反映されている。もう一点は表題が事件名から人物名に変更されたことで、切支丹「女人面」を中心化した印象を受けることだ。

鳳之進いわく――長崎代官を務める商人「伊藤小七郎」は「女人面」と呼ばれ親しまれていた。「女人面」は代官であり、商人であり、その性情は「コスモポリタン」でもあり、先述したような、自由と信仰の都市・長崎に誇りを持っていた。それ故、新たに江戸から派遣されてきた「武断的専制政治家」、「長谷川佐兵衛」と対立する。その対立はやがて民衆やオランダ人にも波及し、黒船の捕縛命令へと発展する。折から港に漂着したオランダ船「マドレ・デ・デイアス」号に危険を知らせるために乗り込んだ「女人面」は、そのまま侍たちの小舟と対決。船は焼き払われ、「女人面」は西坂の丘で処刑された――

鳳之進は最後に、船底に「二十門余りの石火箭が、町の方を向いたまま沈んでいた」こと、それを放ちさえすれば奉行側の兵士はおろか「町すら全滅するだけの余勢」を持っていたであろうことを付け加え「これは一体何を意味するか？」と昔語りを締めくくっている。船中の「女人面」が船員たちを制止して、刑死を覚悟のうえ砲撃をさせなかった、ということであろう。記述が暗示的で、「女人面」の行動の動機には解釈の余地が与えられている。ただここでは、「この愛郷者によって「放浪者よ。お前はどうだ！」と言われているような気がしたのである」といった末文から、「女人面」が自ら作り上げた国際都市・長崎を破壊するに忍びなかったがための無抵抗だと読んでおこう。

「伊藤小七郎」とは長崎代官・村山等安の元来の名[9]である。また「長谷川佐兵衛」とは長谷川佐兵衛藤広、徳川政権の初代長崎奉行である。さらに黒船焼き討ちを主導する「有馬修理大夫」は切支丹大名・有馬晴信であり、本作は実在した長崎史上の人物に材を取っている。

また本作は、史実の〈マードレ・デ・ディアス号事件〉＝〈ノッサ・セニョーラ・ダ・グラッサ号事件[10]〉を踏まえている。しかし、諸勢力の対立・利害関係の絡み合う同事件は、ここでは、奉行側と代官・町民――信仰と貿易を糧とする長崎という自治都市――との対立に単純化されている[11]。

また、「女人面」は代官でありながら「長崎商人」である点が強調されている。彼と長谷川・有馬の対立は、幕府と長崎、侍と商人の対立であり、「女人面」の行動原理は侍への、そして「他人に利用されること」への反感である。最終的には処刑の直前に絞索を奪って自ら溢死してしまったほどで、軍人批判と自由の希求が主人公に託されていると言えよう。

三、『南蛮妙話』→『聖母観音興廃』

『雄弁』に掲載された『南蛮妙話』は奉行の嫡男「民之助」と異人の子「マリアナ」の密かな愛を背景に、二人の縁を切らせんとする老人「小兵衛」と民之助の対話で構成されている。翌年、それを改稿しつつ、前後に江戸幕府の使者「山口丹波」の信徒弾圧を付け加えた形で、『聖母観音興廃』が発表された。全集刊行会、及び谷澤「リスト」は『南蛮妙話』について「『戯談』と内容が酷似」としているが、これは誤記と思われ、『聖母観音興廃』と改めるべきである。『聖母観音興廃』は短編集『血と霊』（一九二三年七月、春秋社）及び『黄夫人の手』（一九二四年五月、同）において『聖母観音』と改題され、『黒石怪奇物語集』（一九二五年二月、新作社）収録時に再び『～興廃』に戻された。

『南蛮妙話』から『聖母観音興廃』へ。一部を受け継ぎながらも、後者が、小兵たち長崎町民が切支丹であることを前景化したために、二作の印象は異なってくる。その他、固有名詞などの相違点もあり、次の表にまとめた。

【表】『南蛮妙話』『聖母観音興廃』相違点一覧

項目	『南蛮妙話』	『聖母観音興廃』
主要人物	小兵衛・大村民之助	小兵・長谷川民之助
物語内容	小兵衛が民之助に対し、マリアナと別れるよう説得する。最後に小兵衛が、マリアナが実の孫であることを告白。	小兵が民之助に対し、マリアナと別れるよう説得する。民之助は最後まで拒絶し、小兵は山口を殺害して死亡。三日後、幕府によって町の信徒たちは処刑される。
長崎の状況	特に記述なし。	「奉行から代官まで熱烈な切支丹信者」、「公儀には内証だが、事実は港をあげて天主の殿堂となってしまった」。
マリアナの境遇	阿蘭陀屋敷の阿蘭陀人と、遊女だった小兵衛の娘との間に生まれた。公儀の処罰を防ぐため奉行の計らいでドウトノサンタ寺院に隠れる。	阿蘭陀屋敷の阿蘭陀人と、遊女だった小兵の娘との間に生まれた。公儀の処罰を防ぐため代官や奉行のすすめでドウトノサンタ寺院に隠れる。
庇護者	濱田弥兵衛	村山東安
長崎奉行	大村忠澄	長谷川
説得の要因となった共同体の危機	民之助がマリアナと密通していたことが発覚、廃嫡の恐れがある。	奉行夫婦が何者かに殺害され、山口丹波が密通と信仰を理由に民之助の世襲を拒んだ。山口は長崎奉行職を我が手にしようとしている。最終的に、山口は小兵に斬殺されるが、既に報告は完了しており、信徒たちは幕府に滅ぼされる。
秘密の発覚	弟が民之助の手文庫を漁り、マリアナの姿絵と手紙を発見。	弟が民之助の部屋の壁穴より、マリアナの姿絵・手紙、およびマリア観音像を発見。
関連する史実	濱田弥兵衛による〈タイオワン（台湾）事件〉（一六二八年）	禁教令（一六一四年）

どちらも史実に関わる固有名詞を用いている。『南蛮妙話』の奉行「大村忠澄」は架空の人物だが、長崎をイエズス会領とした切支丹大名・大村純忠を意識した命名であろう。「濱田弥兵衛」は実在した朱印船船長で末次平蔵のもとタイオワン事件の実行犯となった人物である。『聖母観音興廃』ではまず「村山東安」[12]が『女人面』の伊藤小七郎とモデルを同じくする。奉行「長谷川」も長谷川藤広をモデルにしていると思われるが、弾圧側から切支丹へ役割が逆転している。[13]「山口丹波」は、山口駿河守直友がモデルか。『南蛮妙話』の時代設定が恐らく一六二八年以降であるのに対し、『聖母観音興廃』は「慶長十九年十一月」＝一六一四年が舞台とされる。同年、慶長の禁教令を背景としたバテレン追放が行われていたこと、長谷川藤広が奉行を離任したことを背景としたものであろう。

小兵の娘とオランダ人の間に生まれた「阿蘭陀娘」マリアナは、いずれも「ドウトノサント寺院」（長崎最初の寺院トードス・オス・サントス）に匿われ、名前のみの登場である。だが騒動の中心となる重要人物で、特に『聖母観音興廃』ではマリア観音と重ねられるかのように、その隠匿と発覚が切支丹たちに危機をもたらす。小兵は孫娘に激しい憐憫を覚えながら、民衆を守るために民之助とマリアナの間を引き裂こうとする。だが、「体の弱い神経質な民之助」が、事ここに至って身分を捨て「見所のねえ」マリアナへの愛を貫こうとする。その感激に震えながら、しかしそれが幕府の使者・山口に利用され信徒たちを危機に晒すことを知っている小兵は「悲惨な奇蹟、奇蹟、奇蹟！」と詠嘆する。切支丹の設定を前景化したことで、「奇蹟」という語彙が取り合わせとして機能している。

小兵は最後の手段として、山口の殺害を決意する。「そうすればすべての悶着は消滅するとさえ考えた」のだ。マリアナを閉じ込め恋人と引き裂く道よりも、「二人の恋が安全に成就」する未来を信じる。これは恐らく、マリア観音を秘匿する潜伏よりも、自由な信仰を謳歌せんとする叫びの暗喩である。だが、その英雄的な凶行で物語は終わらない。

そうだ、小兵は、まさかにこの町が三日の後、

幕府の兵に取りかこまれて、殆んど天主教徒のすべてが捕われて処刑されようとは夢にも思わなかった。そうして宗徒の発覚に、大きな手づるとなったのが、家々の壁の中へ匿されていたマリア観音の像であろうとは！（略）小兵はただ誰にも洩らさない殺人の動機となった二つの運命の永遠の平和と幸福とを想像しながら、こうして絶命した。

「黒石の権力観を示す救いようのない暗澹たる結末」[14]には、小兵の行動を無化する黒石一流のニヒリズムとも取れるし、そのニヒリズムを超えて小兵の「想像」に意義ありと叫ぶ、虚無の超克が模索されているとも取れる。

五、考察――殉死を中心に

切支丹に関する話題で、殉教への言及は欠かされることがない。長崎・西坂公園の日本二十六聖人殉教地、熊本は八代のキリシタン殉教者列福記念公園、大分のキリシタン殉教記念公園など、その史跡もまた殉教を強調してきた。では、黒石の〈切支丹物〉は、直接的に殉教を表象しているだろうか。『聖母観音興廃』の小兵の死は、孫娘とその恋人を苦しめる元凶・山口丹波と斬り合った結果である。『女人面』の刑死はというと、「黒船を救う事にもなる」行為ではありつつ「奉行に対する復讐」の結果である。またこうした渦中にあって、彼らは神に祈ることがない。切支丹でありながら、彼らは常に眼前の問題に右往左往し、一喜一憂し、成り行きの中で、衝動的な決断を下し、死に至る。これは、近世の「死を喜ぶ」「死を気にしない宗教」[15]という粗い切支丹イメージには合致する。だが、殉教とは言い難い。

そもそも切支丹にとって「殉教」とは何か。寛永末年、信徒に配布されていた冊子――姉崎正治が「マルチリヨの心得」と名付けた――はマルチル（殉教者、漢字表記では「丸血留」）になるための一定の条件を示しながら、弾圧時代に信仰を貫く指針を与えている。姉崎がこれを紹介すると共に注目したのが「抵抗の不可」である。「島原の叛徒がマルチルとせられないのは此の為」である。マルチルになるのは「ふせぎ戦ふことは叶はざるなり」という原則を守った

者だけなのだ。[16]

文芸上の「殉教」を現実の信仰集団内の要件に照らす必要は、もちろんない。だが、無抵抗の殉教ではなく、衝動的な「抵抗」を表象している点こそが、黒石的〈切支丹物〉の一つの特徴と言える。ここでの「切支丹」に与えられた特殊性は、信仰の深さというよりは、それによって培われた抵抗力なのだ。

鳳之進は「女人面」の死について、「自分の一生を通じてある大きな目的とか主義のために生命を断つ、つまり自分が死ぬことで、自分以外の人々が段々甦るのだという信念の中に死ぬ」ことだと語る。こうした記述は、その抽象度ゆえ、殉教を包含しつつイデオロギッシュな殉死全般――黒石自身の興味に照らせば社会運動の犠牲――の尊重を呼び込むものである。しかし、同時に「放浪者よ、お前はどうだ！」という問いかけを感ずる「私」はその価値観に加わる直前で佇立しているのであり、『女人面』は決断のテクストではなく、迷いのテクストとも読める。

黒石的〈切支丹物〉の結末は、切支丹＝殉教のイメージを飛躍させ、抵抗と犠牲の意義を問うものとなっている。先に挙げた『奇蹟の門』で偽装棄教が題材化されたことも踏まえておきたい。これらのテクストは、弾圧を前に如何に抵抗するか、またその結果（死や改宗）を如何に受け止めるかという思索を含んでいる。

六、終わりに

黒石文芸の切支丹たちは、抵抗する者たちである。だが、抵抗の痛快さと、結果を見つめる痛みは切り離せない。抵抗が無意味なものだったかも知れない戸惑いの中で作品が閉じられる。その戸惑いが読者に共有されてしまうとすれば、それはやはり黒石的〈切支丹物〉がキリスト教文学と言えるような――信仰に殉ずることに価値を与えていこうとするようなものではなく、人命や集団といった物質の有無に容易く揺さぶられてしまう生臭いものだからだろう。

黒石の描く切支丹たちは、無抵抗をもってマルチルとする倫理とは、何か異なる倫理観を根底に持つ。彼らはもっと動的な、生活的な存在であり、あまりに経験主義的な世界で生きている。普遍的教義に基

づき行動する信仰の倫理とは異なり、現世的な利害と個人的な愛憎、切羽詰まった衝動が、彼らの末路を決定していく。

一方で我々は、黒石の〈切支丹物〉を読む時、その主人公たちの日常に、生活に、キリスト教がなんらの支障なく溶け込んでいる様も目にするであろう。キリスト教は生活の一部であり、換言すれば一部でしかなく、「女人面」や小兵の守るべきものに包含される一要素でしかなかったのではないか。大橋幸泰『潜伏キリシタン　江戸時代の禁教政策と民衆』で繰り返し強調されるのは、信徒たちは「キリシタンという属性だけで生きていたのではない」[17]ことである。商人／代官である「女人面」、漁師／海賊である小兵の内部に、それらと混ざり合う一片として、信仰と抵抗力があったのだ。

黒石的〈切支丹物〉は、キリスト教を外来の異質な文化として描かず、既にあり、そこに根付いているものとして描いている。そのようなイメージは、南蛮趣味や、殉教審美を通した切支丹像とは、また異なるものだろう。まさに長崎の風景そのもののように、キリスト教は生活の中にある。言い換えれば、信教の自由が当たり前に存在する場所、「阿蘭陀娘」の存在が許される場所こそ、黒石文芸のユートピアだったわけである。

本文の引用は、『南蛮妙話』『紅毛船焼討』については初出誌から、『聖母観音興廃』『女人面』はそれぞれ『大泉黒石全集6』（一九八八年七月）『同7』（同年八月）から行った。その際、原則として新字を旧字に改め、ルビを適宜省略した。なお、『聖母観音』『女人面』の収録された『血と霊』及び『黄夫人の手』に関しては、国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/）にて閲覧可能である。

注

1. 一九一九年十二月、玄文社。同年九月・十月に『中央公論』に発表された「幕末武士と露国農夫の血を享けた私の自叙伝」「『私の自叙伝』続編　日本に来てからの私」をまとめたもの。後にそれ以降の自叙伝記事を加えた『人間開業』（一九二六年三

月、毎夕社出版部）としても刊行。

2. 大泉黒石「人間開業」（『大泉黒石全集1』所収一九八八年五月、緑書房）七頁

3. 同右　八一頁

4. 村松梢風「大衆文芸家総評」（鈴木貞美編『編年体　大正文学全集　第十五巻』所収、二〇〇三年五月、ゆまに書房）（初出＝『中央公論』一九二六年七月）

5. 由良君美「解題」（『大泉黒石全集6』、一九八八年七月、緑書房）二八四頁

6. 「聖母観音」並びに「女人面」を収録した『血と霊』序文「読者姉兄へ」において、「怪奇的な物語（ファンタスチック ストーリー）と小説（ノオヴェル）」、「怪奇物語の全集です」と述べている。

7. 刊行会「第1期『大泉黒石全集』掲載作品初出一覧」（『黒石廻廊（大泉黒石全集書報）9』＝『大泉黒石全集9』付録、一九八八年十月、緑書房）

8. 谷澤昌美「大泉黒石　著作・刊行物リスト」（『語文』、二〇〇六年十二月、日本大学国文学会）

9. 『長崎県大百科事典』（一九八四年八月、長崎新聞社）「村山等安」項（嘉村国男）。なお、「等安」の名は一般に、イエズス会士から授けられた霊名アントニオを秀吉が転倒させたものとされるが、一部〈女人面（ワントウニョウ）〉という「南蛮船の舳に彫られた」魔除けにちなんだ「ワントウ」の転倒とする資料がある（大葉耀『切支丹史話』（郷土研究社、一九二八年六月）二五〇頁）。

10. 「ポルトガル側の原史料で確認される船名はノッサ＝セニョーラ＝ダ＝グラッサ号」（『国史大辞典第11巻』（一九九〇年九月、吉川弘文館）「ノッサ＝セニョーラ＝ダ＝グラッサ号事件」項（加藤栄一））。『女人面』作中では「阿蘭陀」とされるが、史実ではポルトガル船である。カトリック宣教との関わりをより薄れさせる変更点だが、出島時代における長崎との交接が前提となったものでもあるだろう。

11. 「女人面」小七郎に関する鳳之進の語りは、「歴史には出ていない」「伝説かも知れない」豊臣秀吉の来訪や、山に「何とか云うお化けが出る」伝承に取り巻かれながら始まる。また鳳之進の語りは「何者の霊魂が憑り移ってそうさせるのだとしか思

われぬ」ように感情的なものだった。元より虚実あわい、起こらなかった歴史を創作する自覚の中で書かれた奇談小説なのである。

12. 等安は東安・等庵と書かれることもある。本来は書簡などから「村山等安に作るのが正しい」（古賀十二郎「村山等安と其家族」（『長崎談叢』、一九五三年九月、藤木博英社）。

13. 「武断的専制政治家」（『女人面』）から「無刀のお役人」（『聖母観音興廃』）へ、迫害者から信仰者へ。二作間における奉行「長谷川」の位置づけの変化は、幕府と長崎の対立図式をより明確にするものとなっている。

14. 由良君美、前掲（5）二八五頁

15. 大橋幸泰『潜伏キリシタン　江戸時代の禁教政策と民衆』（二〇一九年三月、講談社）一〇七頁（初刊＝二〇一四年五月、同）

16. 姉崎正治『切支丹宗門の迫害と潜伏』（同文館、一九二五年三月）一三七～一三八頁。「マルチリヨの心得」を含む「マルチリヨの栞」はもと長崎県庁に保管されていた写本を村上直次郎が、さらに村上写本を藤田季荘が写し、藤田写本を姉崎が紹介したもの。解説として『日本思想大系25　キリシタン書・排耶書』所収「丸血留の道」解題（H・チーリスク）も参照のこと。

17. 大橋幸泰、前掲（15）一九一頁